

絵について

全時代全思想全虐殺、全絵画。

ごみみたいなところで絵を描いてないで、ゴキブリしかいない排水溝のような場所から人々を見てないで、どこか高いところへ行ってみたくて去年の年末に奥多摩の山を登った。山から降りて本屋でマルクスを買った。何万人もの人が死んだ思想というものに興味があったから。帰ってからしばらくすると高熱が出て何日も寝込んだ。胃が氾濫した川となり、つま先が噴火した山となった、大地と体を燃え盛りごみのように人が死んでいく幻視を見た。

人間の幸福。自由意志の門。月の光と稲妻。

スーパーマーケットのアイスクリーム売り場の前で、5歳くらいの女の子が踊り、燃える頭でそのステップと着こなしに見とれて、気づかずにビールを開けたら泡がこぼれていった。そしたら君は、君と君の大好きな犬と父と母の墓の後で、金稼ぎとファックの後で、一生分の幸福の後で、ずっと間違えていていたのは美しかったことや素敵だったことは永遠にそのままではないと気づいた後で。

そのときになっても君はまだ待っていてくれるだろうか。本当のことを君に言えるだろうか。

ふと思い出して、学生のとき告白してくれた子が昔アルバイトしていたコンビニへ、何キロも何キロも走っていった。

年齢確認のボタン押せと外人の店員に言われた。

そりゃそうだ。

東京駅の地下をふらふら歩いてたらきれいな女の子を見つけてついていって、ある店にその子が入り自分も入ったらその子が働いていて、仲良よさそうに大学生の店員と話していて、こいつら付き合ってるのかな、ダーバヴィル家のテスのおかげでできた絵。

花や虫や鳥や魚が生まれ変わるように、一つの生が終わり次の違う生が始まるように、音が鳴り空気を振動し消えていくとき、さっきと違うしかし前の音と関わりある音が鳴り、音の重なりが繰り返され一つの音楽になるようにできた絵。時代や個人の危機を利用する絵。じきに普通に絵を描くことができなくなってくる。

あこれ言ってる意味わかんねえやつか。

2つで1つになるもの。

例えば金剛界九会曼荼羅、黄色い線の内側で端から端まで同じような言葉と顔と朝の満員電車（どこかで咳と淡の絡む音が聞こえてくる）、東京中に広がる路線図、それから裸のまま泣き続ける子とうずくまる母がいた円形状の公園が大悲胎藏生曼荼羅。

左手で右手首をつかむ。

違いと同じ。燃える木と七支刀。

想像力での体験、別の違う時間、空間、スタイル、思想、正反対のものを等しく、キャンバスと絵の具という仮想の空間に置き換えてみる。キャンバスとキャンバスの間にある断絶の力を借りる。絵の中に絵を描くことが死者たちにアクセスすることになる。

記憶。

午前二時、昔の知り合いをネットで探す。インターネットには何も無い。

（死ねえい！！！！おちんちんがダーン！！！！！！！！！！）

ぼくのこと覚えている奴まだいるかな。

ベンチに座ってパンを食べている子どもを見ていると、その子どもの姿がいつしか老人の姿に、その老人が子供の姿にぴたりと重なり、どちらかわからなくなる幻視。

フライパンにこびりつき固くなったパスタがなりそこないの文字や記号に成る。人がその思想や信仰に、言葉や記号や音がそれ自身に成り、力を持つプロセス。

色を置いていくと生まれる重力の歪み。

「思想や芸術だとかいったって結局は生活の方便で、文句言わないでつまらない仕事何十年もやってる人のほうが偉いし、大半の人間は都合のいい時に都合のいいこと言ってるだけだ。だから死ぬまでの間ずっとギャグ漫画読んで笑っているみたいに頭下げときゃいいよ。結局誰とも同じところに立てないならてきとうにやってたほうがいいよ。」

そうなんだ。

「どんなに一生懸命やったところでちょっと感謝されて終わりだよ。」

知ってるよ。

昼の眩しい光の中で、子どもたちが大勢で楽しそうに走り回っているのを見ていると、どうしようもなく悲しくなってくるのは、ぼくの頭がおかしいからなのだろうか。

コップに水がなみなみと入っている充実。

勝手気ままに起こる恣意的な欲望と意思。筆を置いてそこから世界が始まるように描く。

どこの古本屋で手に入れたかわからない、その1冊から次の10冊を広げていく本。本棚に何年かあったまま読まずに売ってしまった本。デイヴィッド・ヒュームや和泉式部の探してもいつまでも見つからない本。田舎教師読んでいたら小学校に行くことが決まったように、カバラの本を探していたら物語にカバラ学者が出てくるように、読んでから描くのではなく後になってから読み書きし、予感や運命が逆行していく本。

そんなこと考えながら親子丼腹いっぱい食べて、増やし鬼のルールを守らない子どもたちを追いかけて、走り回っていたらゲロ吐いた授業参観日。

「あ！オオタケいるじゃん！！！！」

胃袋で考えろ。

最初の人、最後の人、初めて吐かれた嘘、初めてされた人殺しはどんなだろう。どんなふう

に最後の人間は息絶えるのか。

「今年の夏は暑くなるね」とか「巨人はまた負けたのかね」とか「イーロンマスクはどうするのかね」とか、石神井公園のドーナツ屋で隣に座った老人が一人でつぶやいていた。

「結局のところ、ぼくの一生はすべて悲しいものだったよ。」

歯と歯の間のドーナツのカスを舌でほじりながら、テーブルの下に隠したウィスキー瓶から注ぎながら、この国がどうなろうとしたこっちゃねえ、世界が終わろうとしたこっちゃねえ。あとお前のギャラリー全員クソだよ。

「ほざけじじい。」